学生の声

努力しない強み

工学研究科　電子工学専攻　木本研究室　博士後期課程３年　浅　田　聡　志

この６年間で、どうすれば幸せに生きられるかと考え、調べまわる時期があった。一つには、「自分の取り組んでいることを純粋に楽しむこと」だそうだが、それが出来ている人はどれぐらいいるか。私自身を振り返ると、残念ながら、「100% 純粋に」ではない時期があったように思える。小さい頃から絶えず競争を要求されてきており、幸か不幸か、どうすれば競争に勝てるかを知っていた。徹底的に努力することである。しかし、他者を優越することにこだわった努力をすると、逆に自分の中の劣等感が強まり、その努力の結果、成功しようが失敗しようが不幸になるそうだ。

劣等感は、比較癖や視野の狭さに起因する。自分の中に軸がない。常に、他人と比べてどうか（優劣）である。無限にある価値観の中で、例えば、研究遂行能力が何よりも重要になり、他者と比較し、その優劣にこだわる。お金を稼いでも、稼いでも、満足できない人と同じで、心が貧しく苦しい状態である。しかし、劣等感に呑まれている本人はその病的な努力を辞められない。そして、嫌なことを懸命に続けるから疲弊し、やがて無気力になる。それだけでない。常に大きく見せようと誇示するから、人から好かれず、対人関係も上手くいかない。

このように劣等感（優越感）に呑まれている人は、「自分は幸せになる」と誓い、比較癖を治す努力をするといい。実際に幸せに向かいだす。人生はこんなにも楽しいものであったのかと気づける。物事を純粋に楽しんでいる人も、膨大な時間をかけて精力的に取り組むし、全力で競争もする。しかし楽しくて満足しているから、結果の優劣が全てとはなっておらず、たとえ競争に負けたとしても、悔しさや復讐心に支配されない。そして何より、自慢しない。顕示しない。権威主義にならない。肩書き、名誉にこだわらない。思い遣り、優しさを失わない。

あらゆる他者評価を無視して、自分の取り組んでいるものに純粋に、真剣に興味を持ってみた。そうするとやはり楽しかった。もはやこうなると努力ではないのである。向上心の土台が他者評価を意識した自己顕示欲である限り、永遠に幸せになることはなく、頑張りが空虚になることを、後輩の方々は忘れないでほしい。

研究旅行記

工学研究科　電気工学専攻　篠原研究室　博士後期課程１年　平　川　　昂

博士課程に進学して、これほど海外に行く機会が多いとは想像にもしていませんでした。特に、今年３月にシンガポール国立大学へ一か月一月留学させて頂いた経験は、今後の人生において忘れられないものになると思います。

シンガポール国立大学において、平日は滞在先の研究室でのびのびと研究を進め、自らの研究に必要な知識を獲得していました。たまにお菓子を持ち込むなと怒られたりしてました。理由は蟻が群がるからだそうです（7 階なのに）。毎日の耳を劈くような豪雷（そのうち慣れた）とともに、”熱帯”を感じました。土曜日には現地の学生とバスケットボールを楽しみ、日曜日には物価の高さと（筋肉痛と）戦いながら、シンガポール観光もしました。多種多様な文化が混ざり合ったシンガポールの風景には感銘を受けたものです。記憶に強く残っているのは、クラークキーでのひとり酒です。景色も綺麗で異国の地での疲れを癒してくれました。シンガポールでの滞在が終わったあとは、発表のためインドネシアを訪問しました。イスラム教国家であるインドネシアの文化や雰囲気、街の混雑具合は今までに見た事のないもので、新鮮でした。特に（生存圏研究所の）吉村先生や Himmi 先生に連れられて食べたドリアンの味は衝撃的でした。最後にはインドネシアで生物学を専攻している方々を前に自分自身の研究発表する機会をいただきましたが、そこで他分野の学生や先生方に説明する事の難しさを思い知らされました。

ところで、僕が博士課程に進学して研究を続けているのは、未知のものを合理性を持って探求することが好きであったことが大きい。今回の海外経験で新しく得られたものは多く、また研究についても進捗が生まれました。僕は博士課程進学という道を選びましたが、どのような道に進むにしろ好奇心の赴くままに新しい挑戦を続けることが次に繋がっていくのではないかと思います。

今回の短期留学に際してお世話になった方々に感謝を申し上げ、結びといたします。